

ようこそ
国際理解・外国人児童生徒教育
サブプログラム へ



国立大学法人

東京学芸大学



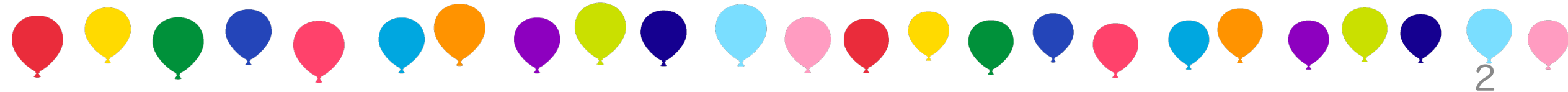
国際理解・外国人児童生徒教育サブプログラム

1. ねらい
2. 授業科目
3. 課題研究
4. 担当教員
5. 教員紹介
6. 院生の声



国際理解・外国人児童生徒教育サブプログラムのねらい

- グローバル化時代の言語的文化的に多様化する学校現場で、その環境・状況を分析し、問題を把握した上で研究課題を設定し、その探究を通して学校を多文化共生空間として構築するための資質・能力を育成します。
- 第一に、国際理解教育のカリキュラムを開発し、実施する力を、第二に、外国人児童生徒等に対する教育として、異文化適応支援、日本語指導等の教育内容を構成し、実践する力を育み、学校において多様性と包摂性を実現するために求められる教師としての力量の形成を目指します。



サブプログラム授業科目

【プログラム科目】

- ★ 基礎科目：多様化する社会の学校教育
- ★ 演習：国際理解・外国人児童生徒教育演習 I・II

【高度選択科目】

- ★ 国際理解教育の内容と方法A・B
- ★ 外国人児童生徒教育A・B
- ★ 国際理解・外国人児童生徒教育の高度研究開発法

【教職専門実習】

- ★ 通年型

【課題研究】

- ★ 院生自身が学校現場等から課題を見だし、その改善や解決に向けた研究を行います



過去の課題研究の一例

教職大学院では、最終学年で「課題研究」と呼ばれる論文を提出することになっています。これは、学校の教育実践上の課題の中から各自がテーマを絞って、そのテーマを選んだ背景や経緯、先行研究、課題の解決に向けて取り組んだことの詳細、その成果や今後の課題等について記述するものです。

- 小学校段階におけるシティズンシップ教育の実践研究
- 「特別の教科 道徳」を通した授業づくりの試み-
- 中学生を対象とした歴史的問題解決シミュレーション教材の開発
- 異なる文化的背景を持つ人々と協働する力を育む授業の検討-
- 開かれた日本人学校に向けた現地採用教員の位置に関する研究
- 役割認識と教育活動にみる強みの分析を通して-
- ローカルシティズンシップの育成を支える教師のポジショナリティ
- 小学校における実践事例を通して-
- 「JSLカリキュラム」における学び合い



担当教員 専門分野

【担当教員】

教員名	専門分野
李 修京 教授	歴史社会学・多文化共生教育
齋藤 ひろみ 教授	日本語教育・日本語教師養成
小山 英恵 准教授	教育方法学
原 瑞穂 准教授	日本語教育学
見世 千賀子 准教授	比較・国際教育学
米本 和弘 准教授	第二言語教育・多言語多文化教育
立田 順一 特命教授	学校経営・国際理解教育



李 修京(YI SOOKYUNG, 이 수경)

■ 専門：人権教育、多文化共生教育、Glocal Citizenship Education、国際関係学、在日コリアン研究、東アジア教育・社会・文化比較、性の多様性研究、歴史社会学

■ 主な担当科目：国際理解教育の内容と方法B など。

多種多様な文化を持つ人々が国境を跨る多文化社会で「他者との出会い」と「共生」のために、異文化理解と人権意識の涵養は重要な課題でもあります。そのために、歴史・社会・文化を念頭に入れつつ、人権教育や多文化共生教育のあり方を模索しています。在日‘外国人’の‘当事者理解’のため、様々な在日外国人学校や‘民族教育’についても学習しましょう。

たくさん体験し、たくさん学んでいきましょう！



■ 専門：日本語教育、日本語教師教育、外国人児童生徒教育、異文化間教育

小・中・高等学校を訪問して多様な言語文化背景をもつ子どもたちの日本語教育について、先生方と一緒に検討しています。また、「子どもの日本語教育研究会」で学校・地域の実践と研究との交流の場を創る活動をしたり、『言語教育実践イマ×ココ』の編集を通して実践を研究することに力を注いでいます。その他、言語学習ストラテジー、自律的学習、子どもの日本語作文の分析、内容と日本語の統合学習、日本語教師・多文化教員の資質・能力などについて調査研究を行ってきました。

■ 主な担当科目：プログラム科目・・・国際理解・外国人児童生徒教育演習Ⅰ

高度選択科目・・・外国人児童生徒教育A、外国人児童生徒教育B

ニュースで飛び込んでくる世界各地の情勢が、皆さんが教室で出会う子どもたちの背景であること、少なくありません。最近、アフガニスタンから、ウクライナから、。言語も文化も、社会の体制も異なる国・地域から日本にやってくる子どもたちの教育は、発見とチャレンジとそして自身の成長を感じられる魅力的な営みです。多様性に拓き、子どもたちの母語や母文化が資源となるようなことばの教育と一緒に考え・探り・そして行動しましょう。

「隣にいる他者」といかに向き合っていくのか？その営みのリアリティとダイナミズムに、皆さんとともに想いを巡らせ、実践できることを楽しみにしています。



■ 専門：教育方法学

教育方法学の特徴のひとつに、理論と実践を往還する、ということがあります。大学院生時代には、文献を読んで研究するだけでなく、近所の小学校に毎日のように通って授業観察を続ける日々を送りました。

人生をさらにさかのぼれば・・・欧州で異文化の音楽を学んでいました。

・研究範囲を示すキーワード：音楽教育、教育評価、国際教育

■ 主な担当科目：国際理解教育の内容と方法A

国際教育は、単に国際的あるいはグローバルな事柄を学習するものではなく、世界の見方を転換したうえで、伝統的な学校教育の在り方の根本的な転換を迫るもの。この授業では、国際教育の内容や方法、授業の具体的なあり方について理論的、体験的、そして芸術的に！探究していきます。

みなさんと一緒に沢山の対話をしながら学べることを楽しみにしています！



■ 専門：日本語教育学／バイリンガル教育、国際理解教育、多文化共生、教師教育

学部では、言語学を学び、言語は支配のための強力な武器になること、また、社会的に劣勢な言語は容易に消滅することに驚きました。大学院では日本語教育を学び、文化的言語的に多様な子どもたち（CLD児）が日本社会からの排除や周辺化、同化の中で生きている側面があることを知り、日本語指導のあり方が無関係ではないことに大きなショックを受けました。それ以来、多文化共生や言語生態学の視点からの言語教育のあり方、CLD児の教育保障をライフワークとしています。

また、ことばの教育とは、何語であっても、人が人とかかわりながらいかにことばを使って考え、表現し、分かち合い、共に生きていくためにありたいと考えています。そして、国際理解教育は、私たちがこの世界に生きる者の一員として、多様な背景を持つ人々とともにどのような社会を創っていくのか、どのように生きていくのかを考え、将来に向けて各々が視点を得て、自分の行動を考えることができる教育です。そのためには十全に機能することばの力を育むことが肝要だと考えています。

■ 主な担当科目：外国人児童生徒教育B

上記を踏まえ、日本語教育、国際理解教育、教師教育のいずれにおいても十分な自己内対話と他者との対話を通して思考の往来と深化を仕組む学習デザインの実現を目指しています。

自分の違和感や疑問を大事に、とことん探究しましょう！



見世 千賀子 (MISE CHIKAKO)

■ 専門：比較・国際教育学、異文化間教育、在外教育施設の教育

多文化社会の学校教育に関心があり、日本とオーストラリアの多文化教育、シティズンシップ教育（市民性教育）について、理論・政策・実践の側面から研究をしています。近年の研究テーマは、多文化社会の市民性教育（日本、オーストラリア）、日本人学校の教育（国際理解教育、日本語指導、移民学習）、高等学校における外国人生徒教育等。

先端教育人材育成推進機構に所属し、国際教育グループと外国人児童生徒教育推進ユニットの事業を担当しています。海外・帰国児童生徒教育、外国人児童生徒教育、国際理解教育に関わる、共同研究や教員研修、フォーラム等のイベントを行っています。

■ 主な担当科目：多様化する社会の学校教育、国際理解教育の内容と方法 等。

多様化する社会の学校教育課題について、教育政策の新動向、新学習指導要領を踏まえるとともに、各論として、海外・帰国児童生徒、外国人児童生徒等、文化間移動する子どもの教育の現状と課題を検討し、今後の学校教育の在り方について、多様な視点から検討します。

グローバル時代の教育にご関心のあるみなさんに、お会いできることを楽しみにしています！



■ 専門：第二言語教育、多言語多文化教育、アイデンティティと言語学習

これまでカナダ、香港、アメリカ、日本で日本語教育に携わってきました。言語教育の中でも、特に言語学習とアイデンティティの関係、「日本語」や「日本語話者」などの中にある多様性に対する意識化などに興味があります。

このような興味を持つきっかけになったのは、中学校での中国帰国生徒たちとの関わりでした。自分のことばを「中途半端」だと不安に感じたり、移動によって何か大切なことを諦めたり、様々な問題に直面し、葛藤したりしている生徒とどのように向き合うことができるのだろうか…と、彼らについて知れば知るほど、言語学習が「当たり前」としてきたことを問い直したり、目を向けてこなかったことに疑問を投げかけたりする必要性を感じるようになりました。

■ 主な担当科目：多様化する社会の学校教育、外国人児童生徒教育Aなど

担当する授業では、ことばの学びが、どのような現実によって形作られているのか、そして、私たち一人ひとりにとって、どのような意味を持つのか、さらに、その学びに教員はどのように関わったり、デザインしたりできるのかといったことを、理論と実践とを結びつけながら批判的な視点で捉え、皆さんと一緒に考えて（悩んで）行きたいと思っています。



■ 専門：学校経営、地方教育行政、国際理解教育

これまでに横浜市立小学校の教諭や校長・副校長として、外国につながりがある数多くの子どもたちやその保護者と関わってきました。そのなかでも、私が新任教師のときにラオスから編入してきた児童を中心に、クラスの子どもたちと試行錯誤をしながら過ごした日々のことは、今でも強く印象に残っています。また、横浜市教育委員会に勤務していた時期には、現職教員の海外派遣研修なども担当していました。現在は、青年海外協力隊（JICA）の事業に参画をしています。

■ 主な担当科目：国際理解教育の内容と方法A、国際理解・外国人児童生徒教育演習Ⅱ 等
各校種における国際理解教育の充実に向けて、理論と実践の両面から検討をしていきたいと考えています。また、外国につながりがある子どもたちにとって居心地がよく、その成長を支えていけるような学級づくりや学校づくりなどについても、皆さんと一緒に考えていきましょう。

対話を通して、一緒に考えていきましょう！



院生の声

1. 授業
2. 研究
3. 実習
4. 現職院生



大学院の授業(講義)について

※2025年度履修便覧参照

講義は大きく 3 種類

- ①専攻科目 . . . 他SPと共に学ぶ必修5科目！色々な出会いがあります。
- ②プログラム科目 . . . 国際SPのみで行われる所謂ゼミ。研究や知見を深めます。
- ③高度選択科目 . . . 自分の興味分野に合わせて選択無限大！他SPの授業もOK!

☆カリキュラム例：M1前期の実例 → → →
(専攻3 + プログラム1 + 高度選択4)

☆アドバイス

- ・1コマ100分、終わるとほぼ必ず最低400字以上の課題が毎時間出ます。自分の体感では一日3コマ以上は根性が試されます。
- ・IB選択科目は実習が増えるため、さらに根性が試されます。
- ・空いた日に非常勤を行う人も多いですが、講義との兼ね合いに苦慮する学卒生も多く見ました。
- ・楽しい講義がいっぱいです。良い大学院生活をお過ごしください！
¥(^^)/

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1限				IB教育入門	
2限	授業実践研究			外国人児童生徒教育A	
3限	カリキュラムデザイン		教員のための学校組織マネジメント		
4限	国際理解教育A				
5限					
6限				多様化する社会の学校教育	
7限			先端型教育開発研究		

教職大学院での研究

研究を進める上で大切だったポイント

- ・ 様々な教育現場に足を運んで、今の現場の状況を知る
- ・ SP内外関係なく色々な先生や学生から話を聞く
- ・ 研究したいのは指導教官ではなく自分自身であることを忘れない
- ・ どうしてその研究をしたいのかを自分の中で問い続ける



入学

大学院での学びにワクワク。大学院入試に向けて作成した研究計画もあるため、研究の意欲も十分。指導教官を決定する。



春学期(1年生)

新しい学びがたくさんあり楽しい反面、自分の研究内容に揺らぎが生じる。指導教官にゼミもしくは個人面談を通して相談する。



夏休み

実習を通して実際の現場を経験すると、自分の課題意識にも変化が生じて研究内容がさらに揺らぐ。



秋学期(1年生)

実習をしながら、授業で理論も学ぶことで課題意識が明確となり研究の方向性が少し見えてくる。2年生の論文執筆の様子から、来年度を見据える。



春休み・春学期(2年生)

春学期の実習で研究に必要なデータを集める場合には、春休みに研究内容をより明確にする。そのデータが収集可能なのか検討する。



夏休み・秋学期(2年生)

2年生の秋学期は授業も少なくなるため、研究に集中する。春学期に集めたデータなどを分析し、検討し、再度分析するを繰り返す。分析と並行して、論文で書けそうな部分から執筆を始める。この時期は、指導教官とより綿密に連絡を取り指導をしていただく。



教職専門実習

実際の学校現場に2年間通い（各年度20日ずつ）、子どもたちとの関わり方や子どもたちのみとり方、教員という仕事への理解を深めることができます。

<実習を経てのコメント>

- 主体的に動くかで学びが変わる
- 素敵な先生方に出会えて勉強になった上、素敵なつながりができた
- 実習校で課題研究をさせていただけた
- 学校の実態を知ることができる
- 指導などで迷ったりしたら、現場の先生に相談することができる
- 実際に子どもと関わっていける
- 実習先の学校や受け入れ体制によって、さまざまな経験や学びの機会が得られる

<私のある日の実習の1日>

- 7:50 学校到着
- 8:15 職員朝会にて、学校全体や学年での情報共有をする。
- 8:30 朝学活を担当する。
- 8:45 生徒の日記のようなもので、生徒の様子を把握する。
- 9:45 授業観察にいき、先生方の指導や生徒の姿を学ぶ。
- 10:45 授業を担当する。
- 12:30 給食指導をする。
- 14:30 学活を担当する。
- 15:20 帰り学活を担当する。
- 16:00 部活指導で生徒と関わる。
- 18:00 日誌を書く。
- 18:30 実習終了。



現職院生として

現職同士で学びの機会が増える

教職大学院には専門性が高く、アンテナの高い現職教員が集まっています。現職同士でつながっておくと、特色ある学校や教育、研究会、書籍等、様々な分野の情報を得ることができます。様々な校種・地域から現職教員が学びに来ていますので、現職同士で情報交換をしながら教育について幅広く学ぶことができます。

科目聴講できる

1年履修の場合、所属プログラムの科目を全て履修登録すると、履修登録単位の上限があるため、あと4科目（8単位）しか履修登録できません。履修登録単位を超えて受講したい科目がある場合は、授業を担当する教員と相談の上、科目聴講という形で授業に参加することができます。

教育観をアップデートできる

私が教職大学院に入学した目的の一つは、自分自身の教育観をアップデートすることでした。日々の授業でもそれは可能でしたが、さまざまな研究会に参加したり、特色ある学校を参観したりすることで、より加速度的に教育観をアップデートすることができました。

光陰矢の如し

人生史上一番短い一年になります。

国際理解・外国人児童生徒教育サブプログラムで
お待ちしております！



国立大学法人

東京学芸大学

Gakugei

Pioneering spirit for education and wisdom